



本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ!

日文

検索

未来をにう子どもたちへ
日本文教出版

はじめに ～図工・美術でゆたかな暮らしを

『美術ってなんのためにやるの?』

これは、かつて私が中学校の教師だったときに、二年生の生徒から問いかけられた言葉です。

そのとき、私がどのように答えたのかはよく覚えていません。しかし、この問いにハッとしたことだけは今でもはっきりと覚えています。

もちろん、子どもたちのよりよい成長のために図画工作科・美術科の学習があることは承知していますし、そうした思いをもって日々の授業に臨んでいることは確かです。しかしながら、図画工作科・美術科の学習の意味を、子どもたちはもちろん、同僚の先生方、保護者の方々に、“分かる言葉”で説明し、理解を得ようと努力してきたらどうか、さらには、地域や社会に対してはどうだろうか……。こう考えると、はなはだ自信がなくなってしまうのです。

平成29年3月に新しい学習指導要領が公示されました。その改訂の検討を行った芸術ワーキンググループが、次のような提言をしています。

「授業の中で、なぜそれを学ばなければならないのかということを実感することについては、教員の意識としても、子供たちの意識としても弱いのではないかという指摘もなされている。このため、授業で学習したことが、これからの自分たちの生活の中で生きてくるといふ実感を持てるよう、指導の改善・充実を図ることが求められる(傍点著者)。」

ここには、『図工・美術ってなんのためにやるの?』という問いに対する答えが示されているように思います。その答えとはずばり、子どもと教師が『図工・美術でゆたかな暮らし』をつくりだすことです。

新しい学習指導要領によれば、それは「**社会に開かれた教育課程**」の実現によって可能とのことです。このことについて、いろいろな先生方とお話をしたところ、多くの先生方がすでに「社会に開かれた教育課程」ともいえる実践に工夫して取り組んでおられました。そして「子どもたちの授業への食いつきが全然違って楽しいですよ」、「やるまでは大変に思えるんだけど、やってみると自分だけで子どもを育てるんじゃないってことに気が付いて楽になりました」、「美術の味方をつくることができました」といった手応えを感じておられました。

本書では、そうした先生方に、取り組まれた実践と、実践するうえでのポイントについて語っていただきました。

ぜひご一読いただき、「**社会に開かれた教育課程**」の実現を通して、子どもたちと『図工・美術でゆたかな暮らし』をつくっていく楽しさを一緒に味わってみませんか？

大泉義一（横浜国立大学 准教授）

第一部

図工・美術で「社会に開かれた教育課程」を実現
その前に

「社会に開かれた教育課程」とは？ … 5

鼎談 子どものイキイキとした学びのために
～教科をつないで「ゆたかな暮らし」へ～ … 18

対談 造形の力で学校を社会に開く … 40

造形を中心にした学校運営 … 44

おわりに … 47

図工・美術で ゆたかな 暮らし

第二部

図工・美術をつないで、
ゆたかな暮らしへ



地域とつ+ふ<>

地域への思いを深める … 22
美術で地域に働きかける … 24

生活とつ+ふ<>

「形や色」で町とつながる … 14
生活とつながる展示 … 16

他教科とつ+ふ<>

小学校で教科をつなぐ … 10
中学校で教科をつなぐ … 12

子どもの人生と
つ+ふ<>

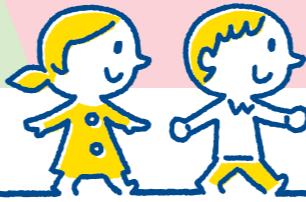
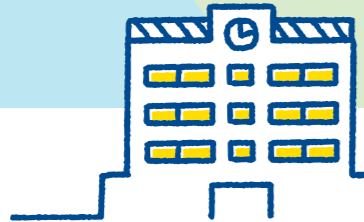
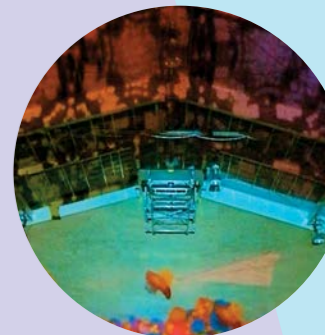
幼稚園・保育園との連携 … 32
将来の姿を思い描く … 34
一人ひとりの子どもに
寄り添う … 36

社会とつ+ふ<>

社会の中の形・色 … 26
美術の授業で
多文化共生 … 28
社会の中の美術に親しむ … 30

学校運営と
つ+ふ<>

学校運営に
美術を活用 … 38



第一部

図工・美術で 「社会に開かれた教育課程」を実現 その前に

まずは、「社会に開かれた教育課程」について、そしてそれを図工・美術で実現するための考え方についてご紹介します。「社会に開かれた教育課程」はどのような考えの下に掲げられたのか、また図工・美術の授業をどう位置付ければよいのか、一緒に考えていきましょう。キーワードは「**つなぐ**」です。

「社会に開かれた教育課程」とは？

新しい学習指導要領三つのポイント

平成 29 年に告示された学習指導要領は、「主体的・対話的で深い学び」、「学校教育で育てるべき資質・能力の整理」、「社会に開かれた教育課程」の三つがポイントであるといわれています。「社会に開かれた教育課程」は、この三つのポイントの中でも、ベースに位置付くものです(図1)。

ちなみに「教育課程」とは、学習指導要領に基づいて個々の学校が編成する全領域、全学年分の教育計画のことです。それを文字通り「社会に開く」ことで、子どもたちが変化の激しい社会を生きるために必要な資質・能力を育成しようというのです。

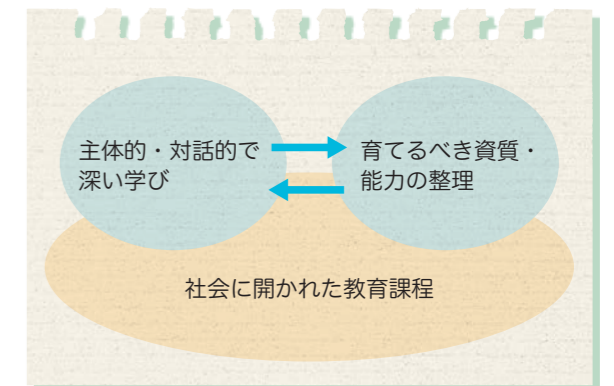


図1 学習指導要領三つのポイントの関係

なぜ「社会に開かれた教育課程」が求められるの？

「社会に開かれた教育課程」が求められるようになった主な理由は、変化の激しい先行きが見えにくい、これからの社会で生きていく資質・能力を育てるためには、子どもの育成の中核となる学校とその教育課程が、地域や社会とつながりをもちつつ、目指すところを共有しながら、一緒に子どもを育てていこうとする意識が必要だからです(図2)。

「そんなこと、分かっているし、もうやってるよ！」という声が聞こえてきそうです。おっしゃる通りです。つまり、全く新しいことを始めるのではなく、家庭や地域、社会と一緒に子どもを育てていく意識を改めて自覚することが、まずは求められているのです。

これから求められる学びのあり方とは…

- 現実の社会とのつながりの中で子どもたちの学びを理解すること
- 社会とのつながりを重視しながら学校の特色づくりを図ること など

地域や社会とつながるとは…

- 学校が社会と接点をもちつつ、多様な人々とつながりを保ちながら学ぶことのできる開かれた環境となること

地域や社会と一緒に子どもを育てていく意識をもつと…

- 地域の社会の人たちに、学校でやっていることを理解してもらえる
- 地域や社会の人たちに協力してもらえる
- 地域や社会の人たちと一緒に子どもを育てることができる

つまり、みんなで子どもを育てることに!!

図2 社会に開かれた教育課程を考える

- ① 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと
- ② 教育内容の質の向上に向けて、子どもたちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること
- ③ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること

図3 カリキュラム・マネジメントの三つの側面

- ① 子どもの学びに着目して各教科内又は教科間で複数の活動を「つなげる」
- ② 子どもの学校での学びと学校外での経験や実社会、世界の動き等を「つなげる」
- ③ 就学前の経験と学校教育、学年間、学校段階間、学校教育と卒業後の人生を「つなげる」

図4 「社会に開かれた教育課程」を実践するための「カリキュラム・マネジメント」の要点

「社会に開かれた教育課程」と「カリキュラム・マネジメント」

では、「社会に開かれた教育課程」は、どのようにすれば実践できるのでしょうか。

「社会に開かれた教育課程」を編成するために必要な考え方が、「カリキュラム・マネジメント」です。「カリキュラム・マネジメント」とは「各学校が、学校の教育目標をよりよく達成するために、組織としてカリキュラムを創り、動かし、変えていく、継続的かつ発展的な、課題解決の営み¹⁾」のことです。

カリキュラム・マネジメントには三つの側面があるといわれています(図3)。このことから、「社会に開かれた教育課程」を編成するためには、一つの教科や授業ではなく、教科間や授業間のつながりに注目しながら教育課程全体で編成し、学校のみならず、地域や社会とのつながりの中で編成することが必要ことが分かります。こうして編成された教育課程の実践においては、教育活動を「編成(P)」「実施(D)」「評価(C)」「改善(A)」の「PDCAサイクル」を通してよりよい編成を目指していく永続的な実践であることが示されています。

「社会に開かれた教育課程」の実践へ

以上を踏まえた上で、「社会に開かれた教育課程」の実践について考えてみましょう。

吉富芳正によれば、「社会に開かれた教育課程」を実践するための「カリキュラム・マネジメント」の要点には、三つがあると指摘しています²⁾(図4)。これらのカリキュラム・マネジメントの要点は、次のようにキーワード化できると思います。

- ① → 「横断」 ② → 「内外」 ③ → 「時間」

これらのキーワードから、「社会に開かれた教育課程」の実践をイメージしてみたいかがでしょうか。

図工・美術の学習と「子どもの暮らしや生活」

ここまでは、「社会に開かれた教育課程」全般について見てきましたが、図画工作科・美術科の実践では、どのように考えて取り組めばよいのでしょうか。

学習指導要領改訂のための検討材料となった平成24年度学習指導要領実施状況調査(小学校 図画工作)における全国児童質問紙調査では、次のような結果が報告されています。

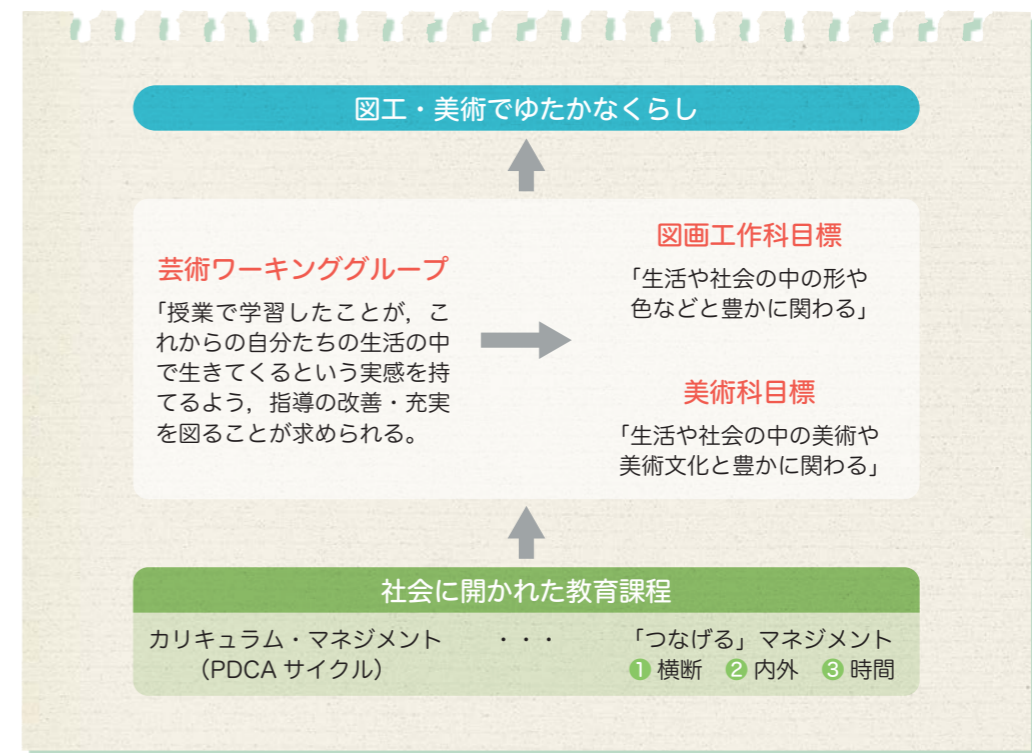


図5 「図工・美術でゆたかな暮らし」の考え方

「図画工作の学習をすれば、ふだんの生活や社会に出て役立つ」という質問に対して、肯定的な回答をした児童の割合は、60.0%であり、前回調査(平成16年度)と比べて肯定的な回答をした児童の割合が10%以上高くなっている。」

以前に比べて多くの児童が、図工の学習を自分たちの暮らしや生活につなげて考えていることが明らかになったのです。

この結果から、新しい学習指導要領では、これまで鑑賞の対象として示されていた「暮らしの中の作品」を、「暮らしの中のものや造形として広く捉え、児童が自分の暮らしと関連付け、生活を豊かにすることに興味をもつことができるよう、鑑賞の方法を工夫することが重要である」として、「生活の中の形や色など」という表記に改善されました。こうした方向性は、中学校美術でも一緒です。

つまり、新しい学習指導要領では、学校で行われ

ている図工・美術の学習と「子どもの暮らしや生活」を「つなげる」実践が求められるようになったのです。

「社会に開かれた教育課程」の実践から「図工・美術でゆたかな暮らし」

さらに、学習指導要領改訂の検討を行った芸術ワーキンググループは、授業場面を想定し、次のように指摘しています。

「授業の中で、なぜそれを学ばなければならないのかということを実感することについては、教員の意識としても、子供たちの意識としても弱いのではないかと指摘もなされている。このため、授業で学習したことが、これからの自分たちの生活の中で生きてくるとい実感を持てるよう、指導の改善・充実を図ることが求められる。」

こうしたことから、図画工作科、美術科の教科目標

にそれぞれ「生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力」、「生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力」が位置付いたのです。

ここまで来てお気付きのように、これらの教科目標を目指すことは、先に述べた「社会に開かれた教育課程」を実現することに他なりません。まさに、「はじめに」で紹介した子どもの問い「図工・美術ってなんのためにやるの？」に対する答えである「図工・美術でゆたかなくらし」を実践を通してつくりだすことなのです(図5)。

図工・美術における「社会に開かれた教育課程」の実践

(1) 大切なこと……“子どもの表現”からつくりだされる「ゆたかなくらし」

図工・美術の学習では、子どもの能動性や創造性の発揮が目指されます。そしてそこには“子どもの表現”が位置付いています。

「社会に開かれた教育課程」の実践においても、それを中心に据えたカリキュラム・マネジメントを心がけたいところです。それは、「子ども=学習者」が表現を通して材料などの「モノ」に実感をもってつながり、近くにいる「友人」や「教師」とつながり、やがては「家庭」や「地域」、そして「社会」へとつながりを広げていく……。子どもが「ゆたかなくらし」をつくりだしていく姿とは、そのように表現を通してつながっていく姿のことなのだと思います。新しい学習指導要領(解説・小学校図画工作)でも、「楽しく豊かな生活とは…(中略)…図画工作科における児童の学習活動を始めとして、学校生活、家庭生活、社会生活へと広がりをもつものであり、そのよ

うな社会では、一人一人の児童が楽しさや豊かさの実感をもって生きていくことができる。」と解説されています。

(2) そして実践へ…

この後は、先ほど紹介したカリキュラム・マネジメントの要点(①横断、②内外、③時間)に沿って、図工・美術の「社会に開かれた教育課程」の実践や、座談会を通して実践者の考えを紹介します。

そこでは、実践したそれぞれの先生方の経験談や感じたこと、考えたことを丁寧に紹介するようにしました。ぜひ、単なる事例としてではなく、読者のみなさんがご自身の学校でどのように実践することができるのかを考えるきっかけにいただければと思います。それぞれの事例で対象となっている学校種や学年も参考程度に考えていただいて結構です。またカリキュラム・マネジメントの要点は、実際の実践ではそれぞれが複合的に位置付いていることを前提にご覧ください。

なお、本書では子どもが関わる対象によって「生活」「地域」「社会」を規定しています。「生活」では子どもが日々関わる出来事全般を対象に、「地域」では組織や施設を対象に、「社会」ではより広い不特定な範囲を対象にしています。

大泉義一(横浜国立大学 准教授)

- 1) 『溝上慎一の教育論 用語集』[http://smizok.net/education/subpages/aglo00013\(curriculum_management\).html](http://smizok.net/education/subpages/aglo00013(curriculum_management).html)
- 2) 吉富芳正『「社会に開かれた教育課程」の意義と条件』『新教育課程ライブラリ vol.11』、ぎょうせい、2016年)

第二部

図工・美術をつないで、ゆたかなくらしへ

ここからは、先生方が実際に図工・美術の学びをつなげた実践をご紹介します。左ページでは具体的な事例を、右ページではお読みいただいた先生方がそれぞれの実態に合わせて計画を立てられる際のポイントを示しています。ポイントを参考にしながら、子どもたちにどのような学びを提供できるのか、考える際のヒントにしてください。



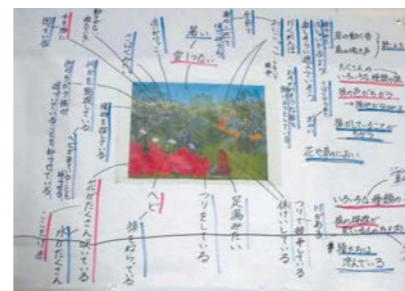
小学校で教科をつなぐ 一枚の絵からはじまる



まずはいつもの教科の学びをつなぐことから始めてみてはいかがでしょうか。
教科の学びの見方を少し変えるだけで、
子どもたちの学びは大きく変わり始めます。

他教科との 関連を考える

小学校の学習指導要領、その総則では、各教科等の関連について、教科等の固有の目標やねらいの実現を目指すと同時に、それぞれの目標、指導内容の関連を検討し、内容の重複、欠落のないように配慮する必要があると書かれています。また、合科的・関連的な指導については、教材や学習活動の関連性を具体的に確認し、指導内容が広がり過ぎて焦点が定まらないことのないようにし、課題選択の場、教科書の使用の仕方の工夫、指導に適した教材の作成が大切であると示されています。



そこで、一枚の絵から始まる、国語と図工を関連させた学習活動を考えました。国語の、事実と感想・意見を区別して書くという学習において、きっかけを何にするかということも意欲の向上のために重要になります。図工の鑑賞における、心を動かし、感じ取りたり考えたりしたという活動経験を基盤とすることで、自然と国語の学習の耕しになり、子どもたちにとって自然な流れでの学習を導くことになるのではないかと考えました。

六年生の実践

2 今回の授業では、アンリ・ルソーの「猿のいる熱帯林」を使い二つの教科の学習の関連を図っていました。

ここでは、国語の「書くこと」の学習の「事実と感想、意見などを区別するとともに、必要に応じて絵の様子を簡単に書いたり詳しく書いたりする。」という目標を達成するために行われています。と同時に、図工の「表現の意図や特徴などについて感じ取りたり考えたり…」ということも学習をしています。すなわち、指導の効果を高めるために、合科的な指導を行っているということになります。

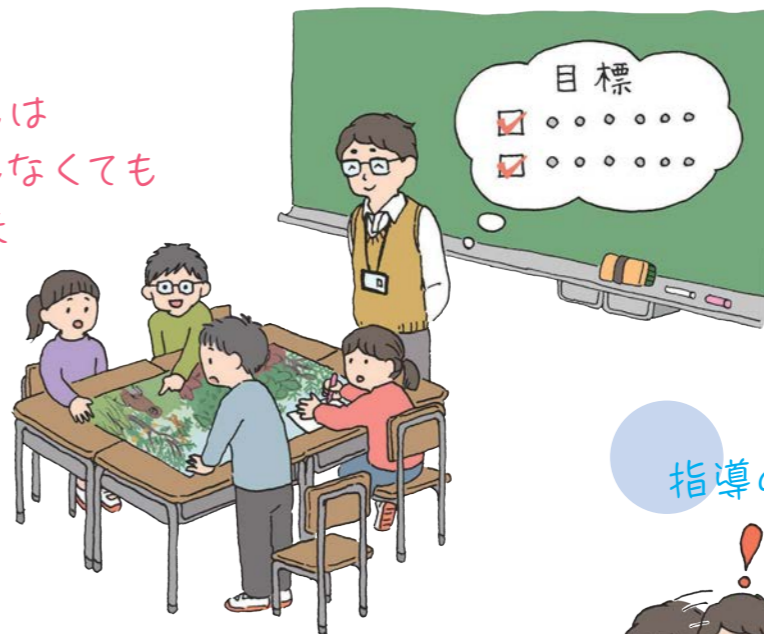
指導の効果や意欲を 高めるための関連



子どもたちは、一枚の絵についてじっくりと鑑賞し、発見したことや感じたことをたくさん挙げていきました。その言葉に対して教師が視点を与えることによって、事実と感想という区別をつけ、国語の「書く」の学習に生かしていきました。図工で鑑賞する

時間をたっぷりとしたことで、子どもたちも国語の書くための材料の耕しや、頭の中での整理が十分にできたこと、じっくりと鑑賞した絵をきっかけにしたことで、多くの子どもたちが文章を書く活動がスムーズに流れていったという成果が見られました。

子どもは意識しなくても大丈夫



子どもの側から見て「これは国語だ」「これは図工だ」と感じなくてもよいのです。活動を進めていく中で自然とそれぞれの資質・能力が身に付いていくような学習活動を展開できることが大切です。

教科の目標やねらいを意識する

やみくもに行えばよいということではなく、それぞれの教科の目標やねらいが達成できているかどうか重要です。

指導の時期を工夫する



年間指導計画を照らし合わせると、指導の時期を入れ替えることで教科等の関連が図りやすくなることもあります。

チーム学校としての
情報交流

学年チームで教科等の関連を図ったどんな活動ができそうか、年間指導計画や教科書などを基に、どの時期にどの題材を位置付け、関連を図った効果的な学習にできそうかという相談をしながら進めていくとよいでしょう。その学年を何度か経験したことがある先生に聞いてみると、「その時期にこれをもってきたら…」といったアドバイスも聞けますよ。



専科で指導している先生は、学級担任の先生と学習内容を交流していくと「国語の物語を書く学習と、図工の想像したことを基に表す活動をうまく関連させていけそうだな」という発見があります。

「チーム学校」とよく言われていますが、職員間の情報交流の機会を多くもつことで、子どもたちにとって必然性のある学びのストーリーが年間指導計画に反映され、それが学校の教育課程として位置付いていくでしょう。



中学校で教科をつなぐ —お茶会体験を美術科と 家庭科で—

おいしい ひらめき

さまざまなルーツをもつ子どもたちが在籍する本校では、日本の文化に触れよう（一生に一回かもしれないから）というテーマで、地域のお茶の先生をお招きして本格的にお抹茶を点てる、お茶会体験を家庭科で行っていました。ここで、ピンときます。「茶器を美術でつくって連携したら、作品を実際に『使う体験』を通した深い学びのある鑑賞の時間になるのでは？ お抹茶代や衛生面、会場作りや師匠との交渉などは任せられるのでは？」。このおいしいひらめきを実現すべく、交渉を始めました。



2

和菓子とお茶が 学びをつなげる

「こちらがタイミングを合わせるので決してご迷惑はおかけしません！」と家庭科の先生に固く誓い、茶器の制作と、職人さんの指導による和菓子制作体験を通した鑑賞を美術で行い、お茶会の体験学習を家庭科で行う、という連携を考え、職員間で話し合い、互いの工夫の末、時間を確保することに成功。授業の全体像を説明すると、子どもたちの目がわくわくしてくるのを感じました。和菓子の制作では、三年生にもなって、楽しみすぎて廊下を走って調理室に集合する子どもたち。な

「こちらがタイミングを合わせるので決してご迷惑はおかけしません！」と家庭科の先生に固く誓い、茶器の制作と、職人さんの指導による和菓子制作体験を通した鑑賞を美術で行い、お茶会の体験学習を家庭科で行う、という連携を考え、職員間で話し合い、互いの工夫の末、時間を確保することに成功。授業の全体像を説明すると、子どもたちの目がわくわくしてくるのを感じました。

んで幸せな時間。「思ったより柔らかい！」「こんな道具でつくるんだ」。職人さんに優しく丁寧に教えてもらいながら、見本を基に和菓子を制作。思うようにできない中、職人技の奥深さを存分に味わっていました。翌日は、自分の器でおもてなしのお茶会。お作法を学び、自分が工夫してつくり上げた器にお茶を点て、正面に座った友だちにふるまいます。自分とは違う形の工夫や釉の景色を味わい語り合う楽しみを体験できました。「器ってみんな同じだと思ってたけど違いがあるもんだよね〜」「苦いお茶と和菓子を合わせるとお茶の苦味も収まるし、和菓子がおいしく感じる！」そうそう、それだよ。

3

半分の手間、 学びは 2倍以上

これを美術科だけで取り組もうとすれば大変ですが、連携すれば分担できます。二教科で取り組めば半分の手間、総合的な学習をからめて、学校を飛び出したらもっと多くの力や人と協力できます。美術科が持ち前の柔軟さを生かして調整すれば、学びは二倍、いやそれ以上。基本的に、学校関係者は子どもが好き、子どもが夢中になって何かをしている姿が大好きな人ばかりです。あとは、声をかけるか、かけないか。波を起こせばあとは乗るだけ。



教科担任制が一般的な中学校。それぞれの先生が専門的に教科学習に取り組んでいるからこそ、つながる学びがそこにあります。

ピンと立つアンテナをもつ



他教科の先生がどのような授業をしているのか、常に意識しましょう。子どもたちの話から聞こえてくることもあります。

他教科の観点は任せてしまい、 美術科が学びの軸をぶらさず 形を変えましょう

どの先生も子どもが一生懸命頑張る姿が好き。提案してみれば意外と実現に向けて動き始めます。柔軟な美術科が軸をぶらさず形を変えましょう。家庭科の先生と協力するのであれば、衛生管理などは、プロである家庭科の先生にお任せするのが一番。

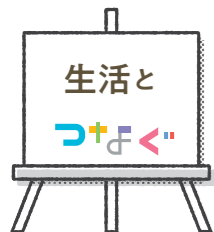
学習を 支えくれた人たちが いることを伝える

学校も地域も、授業を応援してくれる。愛されている、大切にされているんだという感覚は意欲を引き出すのに十分な力があります。きちんと伝えれば「こんな体験はうちの学校だから出来たんだ」という気持ちももてるでしょう。自分の地域、学校が自慢の種になるっていいですね。



さらに 地域とつなぐ

活動でお世話になった方のお店を紹介すると、関心のある子どもは出かけていき、さらに地域とつながっていきます。今回も職人さんに会いたいとお菓子を買いに出かけた子どもがいました。



「形や色」で町とつながる — 商店街の「アート・カード」を つくろう —



生活の中にある造形

町の中にも「形」や「色」、「全体」や「部分」に注目して見ると、面白いもの、気になるものがたくさんあります。本校の校区にも「プレーメン通り商店街」という商店街があり、彫刻作品、建物、地面、商店街を彩るものや模様、店の内容が分かるように意図された看板などさまざまな造形があります。それらのよさに子どもたちが気付くことができれば、より愛着をもつようになり、生活や町の造形と豊かに関わることができるようになるのではないかと考えました。

2



今回はその商店街に行き、写真を撮ってアート・カードをつくる活動をしました。

以前アート・カードで遊んだ経験から、それを自分たちの身近な場所にあるものでつくることは、より興味をもって、周りを見ることにつながると考えたからです。

事前に別の商店街の写真を見せ、「気になる」「不思議」「面白い」ものをみんなで話し合い、「形」「色」だけでなく、「アップ」「ルーズ」「角度」といった写真の撮り方での見え方の違いも伝え、ポイントを意識できるようにしました。

活動時間は十分にとりました。いろいろな見方を試したり、友だちと話し合ったりすることができるようにすると、初めはどこを見ればよいか迷っていた子どもたちも、自分のよいと感じるところを見付けることができたようです。

撮った写真は、大きく見ることが出来るタブレットを使って選びました。見付けたもののよさがより伝わるようにトリミングしてもよいこととし、一人一枚選んだものをラミネートしてカードにし、全員分まとめてグループ分つくり、『どこで見つけたかクイズ』や、似た「色」や「形」を繋げる『七並べ』などのアート・ゲームを行いました。

3

「もっと探したい」が愛着へ

見慣れている商店街だけに、見る角度を変えることで面白いものになっていくことを発見したときの喜びはとても大きいようでした。カードを見て「行ってみたい」「どこから見たの？」など、友だちの見方や感じ方を楽しんでいる子どももいました。また、写真の撮り方を工夫すると、普段見ていたものが面白いものに変わっていくことにも気付いていました。学習の後、「家の近所でも探してみたい」「こんなところにもアートがあったよ」と、町の見方が変わり、愛着がより深まったように感じています。

事前の許可をきちんととる

町の施設を利用する際には、例えば商店街の理事長などに学習の趣旨を伝えておきましょう。トラブルを防ぐだけでなく、教育課程を共有することにもなります。



サポート体制を検討する

町での活動は子どもたちが散らばるため、学校の教員だけで目が届くのか、保護者にも協力していただくのか、学校内で確認しておきましょう。保護者の方にも学習のねらいを理解してもらうことが大切です。



デジタルカメラやタブレットなどを活用することで、子どもたちは目で見るのとは違った視点をもつことができます。状況が許すのであれば積極的に活用しましょう。

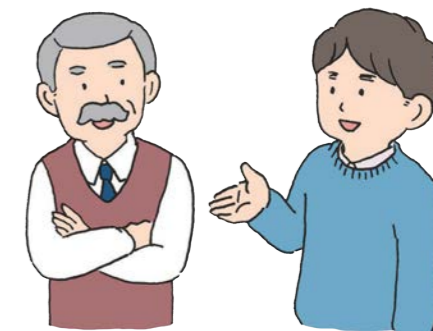
ICT機器を活用する

ワークシートを活用する

外での活動の際は、個別に声をかけきれない場合もあります。造形的な視点で見ることを忘れないように、ポイントを書いたワークシートなどを用意しておくといでしょう。

成果を協力者に報告する

学習後のケアも大切です。理事長など相談した方には事後にも挨拶をし、活動の成果を見ていただくことで、教育課程への理解がさらに深まり、次からの協力体制にもつながります。





生活とつながる展示 — 学校を美術館に —

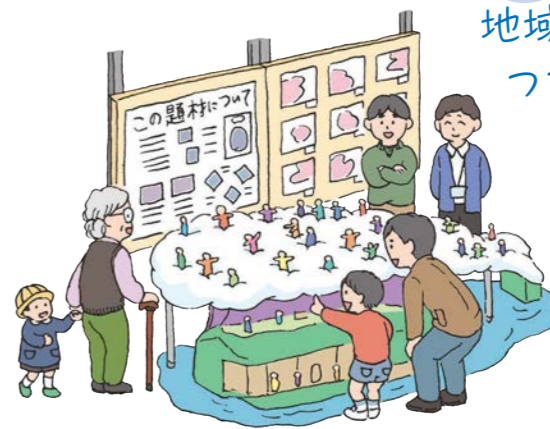


子どもが表した作品をそのまま持ち帰らせるのではなく、少しの間だけでも展示してはいかがでしょうか。きっと子どもたちは興味をもって作品を見るでしょう。日常的に作品に触れることで、図工の学びと学校生活が自然とつながっていきます。

展示空間が生活環境にもたらす変化



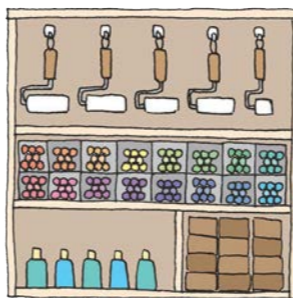
学校のさまざまな場所が展示空間となります。自分の作品にあった展示場所を見つけたり、思いが伝わりやすいように展示の仕方を工夫したりすることも大切です。



展覧会は
地域と学校が
つながる場

展覧会を通して学校のことを保護者や地域の方々知ってもらえるよう、学校や各学年の児童の個性やその力を結集した力が発揮されるような展示を心がけましょう。

材料や用具も展示できる



学習用具や物を並べることも展示につながるということを意識させたいものです。図工室の物も形・色・大きさ・素材などにこだわって整理すれば、美しい展示空間となります。

地域との交流

地域の公共的な施設などに作品を展示したり、作品の説明をしたりすることで、製作活動の意味や価値を広く伝えることができます。美術館では、ワークショップが開催されることもあります。多様な人々が集まり関わる場では、新たな作品が創造されています。



自らの作品展示
から社会への
参画へ

展示が生活に身近なものとなって、造形的な見方や考え方が育まれることは、社会への関心につながります。それはやがて、子どもたちが社会に参画していくことへの一つのきっかけとなっていくに違いないと考えます。

作品展示で豊かな心に

生活空間が変われば、子どもたちの気持ちは変化します。殺風景な部屋にも一枚の絵があれば、空間に色彩が加わり思いが生まれ、人の心を豊かにするでしょう。行事や季節などの変化に合わせて、学校の生活空間に児童の作品を取り入れるとともに、地域に公開する場も設けるなど、さまざまな展示ができるように考えました。



いろいろな展示

各教室の廊下に備えられた掲示板への展示のほかに、踊り場の隅、壁やフェンス、廊下の上部の空間を生かした展示をしました。また、学年ごとの取り組みの紹介や、行事に合わせた作品の展示のほかに、表現の過程を紹介する工夫を取り入れることで作品の魅力をより深く伝えられるようにしました。その際、学校の実態に合わせてテーマを考え、生活空間から、アートを身近なものとして感じてもらえるよう心がけました。

展覧会の工夫は保護者や地域の人に学校のことを知ってもらえるチャンスです。一年生では国語の教材の「くじらぐも」をテーマに展示しました。総勢137名をくじらぐもに乗せ、そこから子どもたちの大好きな四季の景色(絵画)を眺めさせることに。大きなくじらと見下ろす町は子どもたちの共同製作でした。一人ひとりに個性があり、その思いや感じ方は違います。それぞれの個性やその力を結集したエネルギッシュなパワーを見てもらいたいという思いから、このような展示空間をつくりました。

子どもの感性を高め、 アートが身近になる

「こんな作品をつくるんだね」。普段は見られない友だちの作品のよさに触れられる子どもがいました。異学年の展示を見ることを通して、過去の思い出を振り返ったり、今後の学習への関

心を高めたりする子どももいます。また、作品を見てもらいたいと、保護者を学校に呼んで、頑張ってきたことや、友だちの作品の面白さを伝える子どももいます。さまざまな展示の場を用意することが、子どもの感性を高めることにつながるとともに、よりアートを身近なものとして親しむことにつながられたと考えています。

子どものイキイキとした学びのために ～ 教科をつないで「ゆたかなくらし」へ～

「社会に開かれた教育課程」。その第一歩は教科をつなぐことから始まります。このことを教育の最前線で日々子どもたちと触れ合っている先生方はどのように考えておられるのでしょうか。

大泉先生が、横浜国立大学教育学部附属横浜小学校の筒井彩先生、横浜市立上飯田中学校の荻島千佳先生にお話を伺いました。

「社会に開かれた教育課程」の印象

大泉(以下 大) 「社会に開かれた教育課程」が、今回の学習指導要領改訂の主旨の一つで、この冊子のテーマですが、この言葉を知ったときの印象についてお伺いしたいと思います。

筒井(以下 筒) 学校で学んだことが生きていく、子どもが「自律」していくようなイメージをもちました。自分で問いを見付けたり何かをしようと動き出したりするような子どもを育てていくことかな、と。

大 昔から、子ども中心の教育と言われて久しいのですが、それをしっかり後押ししていくというイメージですね。

荻島(以下 荻) 私は、もともとやっていたことが文章化されたという感じでした。「先生はたくさん、育てる子どもは一人」という意識でずっとやってきたので。やっと私のターン！って感じです(笑)。「美術室から飛び出そう」という言い方をしていたんですが、「社会に開く」という新しい言葉ももらって、なるほどと思いました。これまでしてきたことに加えて、地域の人にも応援してもらえる、保護者も巻き込んでいいということが明記されて、やりやすくなる感じました。

大 学習指導要領のことを足かせのように捉えたり、それを正確に履行するためにはどうすればいいんだと焦ったりする様子を見ることもあります。しかし荻島先生は追い風として、今やっていることを

一歩前へ進められると捉えてらっしゃる。

荻 だから地域の人を呼びたいときも、「社会に開かれた教育課程が～」と相談すれば済むようになりました(笑)。したいことがしやすくなりました。

大 学習指導要領って、社会的な要請の部分もあるけれど先生がしてきたことを大事にしてるんですね。これまでやってきたことをもう一歩進めるための応援ツールという側面もあるかもしれない。どう感じるのかは先生方の教育観によりそうですね。

子どもにどのような力を付けてほしいか

大 筒井先生が子どもたちと接する際に意識されていることはありますか？

筒 どの教科でも活動でも、子どもの考えからスタートしたいと思っています。子どもの見方とか気付き、疑問から始まるような、自分ごととして捉えながら活動できるようにしたいと思いますね。

大 一貫しているものがありますね。中学校の三年間ではいかがでしょう。

荻 私は、考えなくても生きていけるけど、自分で考えて自分で決めて自分の進みたい方向を見付けられるようにしてあげたいと思っています。

大 それはということですか？

荻 普通はこうだから自分もこうする、という生き方をしないで、自分でものごとを生み出すことを恐れずに生きていくのがいいんです。そのために「考

えること」を大切にしている「自分で考えてなんとかするのが一番楽しい」ということを三年間かけてコツコツ教えている感じがします。

大 具体的にどんなことから始めるんですか？

荻 ポートフォリオをつくることを大事にしている、自分が考えたことの経過が分かるようにしています。さんざん考えて結論を出したっていう道筋が自分でも見えるようにすることを大切にしているんです。

筒 一年生からするんですか？

荻 はい。最初にレタリングをするんですが、「永」のレタリングを教えたあと、クラスの雰囲気などを基に「賑やかな」とか「きちんとした」といったお題を出します。同じお題で、自分の思う「永」を一時間、鉛筆のみで表すんですが、この過程から全てポートフォリオにしています。表現したら、何故そのように表したのか横に理由を書いて観賞会をします。観賞会では、それぞれがいいなと思ったものを推薦し合うんですけど、その理由も説明してもらいます。そうやって理由を考える習慣をつけます。

大 なるほど。自分がいいと思ったこと、さらにその根拠を大切にすることですね。育てたい力があって、それを題材を通して育てるということでしたが、学級担任のお立場だといかがですか？

筒 子どもが「自分の考えを言っていていいんだ」って思えることを大切にしています。そう思えないと発言しなくなるので。例えば九割の子どもがAの意見で一割の子どもがBの意見といったときでも、その一割の子が「でも私はこう思う」って言えるようにしています。多数決をしないで、皆が納得するまで話し合うということを繰り返してやっていますね。多数決だと少数派だから終わりってなっちゃう。そうではなく、その子が自分の強い思いを話して、周りも聞いてその子の考えのよさを捉えて、みんなが納得できる結論にしてほしいんです。一年生でも、くり返すうちに子どもから何かを言い始める機会はすごく増えたと思います。



子どもたちの学びの経過が見える

「すり替わる瞬間」を見落とさない

大 それらを踏まえた上で、どう教科をつなぐのかという話を伺いたいのですが、筒井先生いかがですか？

筒 生活科で水遊びをした流れで、シャボン玉遊びをしたんです。子どもたちは、楽しみながら普通につくるだけじゃなくて、泡をあふれさせるとかいるいるなことをし始めたんですよ。そしたらある子が泡のポタンと垂れてるのを見て「色を着けたら、面白くない？」って言いたしたんです。そこで画用紙を渡して「ここに垂らしてみる？」って提案しました。色も三色用意していたのを着けてあげて。すると、色を混ぜたり形を写したりしてできた形を見て「これ、〇〇っぽーい」といった会話が生まれていきました。そのうち「〇〇みたいだから、クレパスでかき足していい？」となって、自然と作品になりました。気が付いたら図工にすり替わってたんです。実はあとでこの題材につなげたいと思っていたんですけど、子どもが自分で見付けてブクブクブクブクっていうのをやり始めたので(笑)。

荻 今だー！って感じ？

筒 そう、今だー！って感じで(笑)。子どもが自



大泉義一先生

分たちで見付けてやっていくようにつながったのがすごくよかったですね。子どもから動き出しているし、私の思いともつながったなって思います。

大 今、筒井先生は「すり替わってる」と仰って、荻島先生は「今だー！」って仰ったんですけど、子どもの思いと教師の願いが重なることで、学びをつなげることができたんですね。この時間は生活科、この時間は図工って分けるんじゃなく、子どもの活動に応じてそれこそ「すり替わってる」。時間での区切りではない活動の推移ですね。画用紙を出すか出さないかというのは小さなことですけど大きな分岐点です。子どもが教科の活動を越えるところを応援していて、そういう子どもを「素敵だな」と思っで見つめるのも素敵だなまざしですね。

教科をつなぐと子どもがイキイキする

大 学級担任だと子どもたちの活動を見ながら、別のねらいの活動にすり替えていけますけど、教科担任だとできないですね。荻島先生は先ほど、これまでずっと取り組んでいると仰っていましたが、そもそも教科をつなごうと思ったきっかけってなんですか？

荻 授業中に巡回してたとき、教室に入れないでいる子どもを連れて入ると理科の授業でした。板書を

見て美術っぽいなと感じる単元だったんです。化学反応のあたり。「薬品の反応は美術っぽいよね、花火と同じじゃん？」とひそひそ話しかけると「え？理科と美術って関係あんの？」と様子が変わり、興味がわいたような顔をして教科書を見始めたことがありました。それからは美術の授業でも「釉薬は焼くと色が変わる」だけでなく、化学反応で変わるんだよと一言加えるようにし始めました。焼き物の縮みを計算するという数学もね。でも実際に最初に一緒にやったのは国語ですね。先生と生徒が絵の具や画材を貸してくれないかって言いに来たので、理由を聞いたらブックカバーの帯をつくっているっていうので「それ美術じゃん！」って。それで、内容を確認して、分担して連携しました。

家庭科の先生と話をしていたら、授業で地域の人のおもてなし会をすると聞いてお願いしたこともあります。快く応じていただき、最初はお皿とテーブルセッティングに使うものは美術で、地域の人への声かけや当日の料理は家庭科で分担して始めました。生徒から招待状をつくりたいといったこともあって、最終的には「美しく飾るのは美術、おいしく料理を作るのは家庭科」という観点で整理したら、それぞれの教科でしなきゃいけないことがはっきりしてきて、面白い授業になりました。

大 やりながら調整したんですね。



荻島千佳先生

荻 それで、追いかけていけばいるできるんじゃないかと思い始めました。教科間で連携すると、子どもたちがイキイキして学習に意欲的になるのが分かってきたので、校内で年間カリキュラムを検討するときに、各教科のカリキュラムを全部持ち寄り内容や時期を全員で見比べたんです。そしたら「社会はこんなことやってるんだ、うちこれやってるよ」「じゃあお互いですり合わせてみる？」「私が形を変えるから一緒にやらない？」「ここにあるやつをこっちに持ってくるだけから、いける」ってたくさん先生の先生が気付いてくれたんですね。先生はいっぱいでも学習者は一人だから、連携させたらもっとつながって深く学べるはず、と提案したんです。

大 すごく楽しそうですね、大変そうだけど……。

荻 美術の授業で「今、社会でもやってるんでしょ？」とか「数学の教科書で見たでしょ？」って声をかけるだけでもいい。社会の先生は「美術の図版や資料集を貸して」って言いにくるし、「美術ではどんな問いかけをするんですか」とも聞かれました。国語の百人一首が始まるタイミングで日本文化の鑑賞などに取り組んで、国語便覧を持って来てもらうような関連付けだけでもいい。

大 本当に素晴らしいですね。小学生ではどうなんでしょう。つなげた方が楽しくなりそうだとか、そういう予感がありますか？

筒 そうですね。例えば算数で形の学習のとき、これが四角、これが三角ってただ教えるんじゃなく、いろんな箱を持ってきて、形遊びのようなことをするんです。するといろんな形に触れて、「こんなものがつくれる」とか「四角い箱をいっぱい積み上げて坂にしたら丸い箱が転がるね」って気付いていきます。子ども自身の感覚として、教え込まれているんじゃないんです。箱をいっぱい集めた造形遊びの中で、丸だと転がるか四角だと積み重ねやすいとかいったことにどんどん気付いて、その経験を生かして算数で四角の特徴を知っていくって感じですね。最初は四角という言葉もなくて、箱の形とかポール



筒井 彩先生

の形とかいう感じで、後の単元で名前を知るんですが、そういうところはつながっていますよね。

大 まず生活の中から同じような形の物を見付けるんですね。

筒 最初、身近にある物で、これと似た形のものを見付けてみようって感じです。最終的にその形の特徴を知る。

大 先生が仰った、転がるか積み重ねられるというのは、まさしく〔共通事項〕の「知識」ですね。自分が転がしたり積んだりしたくなる感覚や、実際の行為を通して形の特徴に気付いている。算数か図工かではなく子どもはしっかり総合的に捉えているということですね。

筒 遊びから入っていくというのはよくあります。1から10までの数を知るというのも、学校の中にある5個のものを探しに行こう、ということから始めたりします。

大 フィールドワークするんですね。色んなもの見付けて来るんだらうな。生活経験の中から探すから、子どもにとっては充実感ありますよね。

対談は更に白熱！先生同士のつながりや保護者とのつながりまで、続きはこちらからご覧ください。



地域への思いを深める — 地域への思いを 絵に表現する —



子どもたちの学びを地域とつなげる。
さまざまな教科等で取り組んでいると思いますが、図工の時間は、
そうした学びをつなぎ、思いをさらに深める時間となりそうです。

子どもたちは 地元が大好き

給食の時間や休み時間に「にぎ
どん(商店街のお祭り)行く?」「神
社の盆踊り楽しみだね!」などど
うれしそうにおしゃべりしている
子どもたち。子どもたちは本当に
地域の公園や神社、お祭りなどが
好きで、地域の人や施設、行事など
とも深く関わっています。その
ような様子を見ながら、子どもた
ちの日常の中に深く関わっている
「町」を絵に表すことで、「町への
思い」を互いに伝え合い、活動を
通してさらに自分たちの暮らす地
域への愛情を深めていくことがで
きるのではと考えました。

学年の先生方に伝えたところ、
きっと楽しく目を輝かせて取り組
むのではないかという話になり、
地域にはどんな素材があるか探す
ことになりました。その頃総合的な
学習で取り組んでいた「新城のす
てきな人、もの、こと」と関連さ
せると、子どもたちのイメージも
より膨らんでいくのではないかと
いうことになり、学んだことやそ
のときの子どもたちの「思い」を
生かしていこうということになり
ました。

2 思いを 伝え合う絵

総合的な学習の中では、町探検
をしたり、地域の商店街に出かけ
て職業体験をしたりして、地域の
素晴らしさを再発見し、愛着を強
めていきました。そのときどのよ
うな感想をもったのか、一番好き
なもの、最も印象的だったことや
ものなどを思い出すように投げか
け、図工の時間を始めました。一
人ひとりの大好きな人や場所、出
来事についてたくさん話し合う中
で、「こんな出来事を伝えたいな」
「この場所が一番好きだな」とい
う思いが深まっていったようです。
みんなが大好きな場所や人、出来
事などを黒板いっぱいに書きだ
す中で、「新城の町に生きている」
「やっぱりいいところだね」とい
う気持ちを共有することができま
した。

他の先生も 巻き込む

地域のことを調べる際の下調べ
や準備、地域の方へのご挨拶や
お願いの仕方などについて、総
合的な学習を研究している先生
や得意な先生などにアドバイ
スをいただくこともできます。積
極的に職員室の中で先生方に相
談しましょう。



同じ学年の先生に 話してみる

他のクラスの子どもたちにもた
くさんのエピソードがあります。
学年の先生方と一緒に子どもた
ちを見ていくことで新たな発見
がいくつもあり、授業のイメ
ジがどんどん膨らんでいきます。

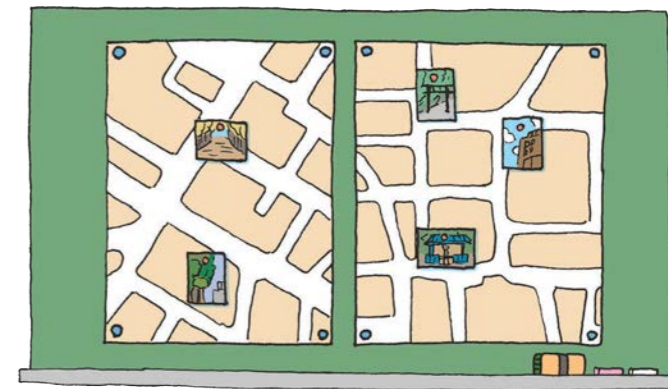
子どもの 「地域への思い」を 大切にする

自分たちが住む地域への愛着を深めな
がら表したいことを表現できるように「ど
うしてこの場所なのか」「どうしてこの
出来事なのか」「なぜこの人物をえがく
のか」など一人ひとりの思いを聞き、そ

のこだわりを大切にしましょう。
子どもとの対話、図工ノートでのやり取り
を通して、地域の様子を表現したいという
気持ちを高め、自信をもって、活動に取
組んでいけるように支援することが大切
です。

子どもたちが自分で 「感じる」「考える」こと を大切にする

調べたことや、その中で感じた地域の自慢に思うこと
などを発表する時間をとりましょう。思いを学級、学
年全体で共有し、深めていくことが大切です。
どんな場所があったか、どこでどんな体験をしたの
か、絵地図なども使って話し合いながら、表すもの
のイメージをもてるようにしたいです。



写真なども活用する

子どもたちの思いに耳を傾ける時間を
大切にして、愛着や居心地のよさを絵
に表現したいという思いを高めたいで
すね。体験を具体的に思い出せるよう
、話し合いの起点となるような地域の写
真を提示するとよいでしょう。

3 子ども自身のこだわりが 地域とつなぐ

「ぼくは新城公園の恐竜の形をした遊具で遊ぶのが好き」「江
川せせらぎは、鯉や鴨がいて、おじいちゃんとよく散歩をする
んだ」。作品を見せ、伝え合う様子を見てみると、子どもたち
みんなの大切な思いを感じました。自分だけのこだわりを表現
することができたように思います。



友だちとよく遊ぶ場所やこれまでの思い出を語り合
いながら、子どもたちが、具体的に表現したいもの
をイメージできるようにしたいですね。グループで
取り組み、お互いの表現のよさや工夫に触れること
ができるようにしましょう。

友だちとの 関わりから学ぶ



美術で地域に働きかける — 地域との連携で、自尊心や コミュニケーション能力も高まる —



中学校なら美術部から始めてみては？



地域の施設で、 多くの人とつながる

2 制作の中で、上級生が下級生に優しく声をかけて手伝う姿や、竹林クラブのボランティアさんと話し合って課題解決へ向かおうとする姿など、普段の部活動では見られない生徒の姿を目の当たりにしました。以降、毎年趣向を凝らし、隣の中学校の美術部や校区の小学校有志児童との混合グループでの活動など、異年齢交流による共同制作を夏休みに行なってきました。

同じ2013年には「都筑マイプラザ」のイベント絵画を制作させていただいたり、2014年、2016年には、ヨコハマ市民まち普請事業として活動する「中川ルネッサンスプロジェクト」からのお声かけで、中川駅前に階段絵を制作させていただいたりしました。また、2017年からは商用施設「港北 minamo」のイベント装飾や周年行事アニメーションの制作を行なうなど、地域との関わりを通して普段は体験できない学びの場を提供していただくことができました。

本校は他地域からの転入家庭が多く、また子どもたちは通塾率の高さや習い事など、日々の多忙さから異年齢交流の場が少なく、コミュニケーション能力を育む場に課題を感じていました。美術科としても、限られた時間の中での作品制作は、とかく個人作業になりがちで、課題解決の一助となる機会が少ないことを懸念していました。

そんな中で2013年に近隣の遺跡公園内にある「都筑民家園」よりお声がけいただき、園内の竹の間伐材を使ったワークショップ企画に参加しました。美術部の生徒が参加したのですが、大変有意義な活動でした。

生活や町の中に 自分たちの 作品がある喜び



これらの取り組みを通して、生徒たちからは「生活や町の中に自分たちの作品があるのは、単純にうれしく、誇らしい」という意見が多く聞かれました。また地域での活動にはさまざまな年齢の人が関わることもあり、地域理解や愛着を深めることにつながるだけでなく、コミュニケーション力の向上や自尊心を高めることにもつなげることができる、地域で生きる子どもたちにとって大変有効な活動だと実感しています。

地域とつながるのはハードルが高い。そんなときは美術部から始めてみてはいかがでしょうか。そこでの経験を授業に還元できればまずはOKです。



声をかけてもらえるには、
交流が大切



着任後すぐは校区のことはよく分からないので、学家地連やPTA、おやじの会など、地域連携の場に貪欲に顔を出し、交流を図るのもよいでしょう。

職場体験学習でお世話になった事業所さんや盆踊りの地域パトロールの方など、つながれる人や組織は意外とありますよ。

学校にも了承を

部活動とはいえ校外での学習ですので校内の手続きはきちんとしましょう。スムーズに許可をいただくには、日頃から活動に対して理解していただいていることが大切です。



思い切って相手に
お任せする

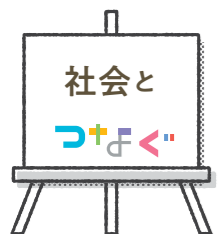
先方からお声がけいただいた場合、準備物などはお任せしてよいでしょう。必要なものは学校からも持参します。地域を盛り上げようと精力的に活動されていらっしゃる方との協力が大切です。



授業につなげる

部活動で行ったことすべてを授業で行うのは難しいかもしれませんが、そこで得たことを授業で還元することはできます。今回紹介した中では、班による制作活動から得られることのエッセンスをアニメーション制作として取り入れ、コミュニケーションをとりながら活動する授業を行っています。





社会の中の形・色 —街のロゴマークを 考えよう—



身近なものから 社会につなげる

2

鑑賞対象となるロゴマークは、生徒たちが家から集めてきたものを使います。教師が用意したものにはない、生活感や趣向がにじみ出たマークの数々に、「何だかお菓子のマークばかりだね!」「このマーク、私も見たことある!」と生徒たちも興味津々。その後、「集まったマークを色で分けてみよう。どんなことに気付く?」「どうしてこの字体が使われているのだろう?」と投げかけ、造形的な視点をもって鑑賞するように促しました。生徒たちは、ふだん何気なく目にしていたマークにさまざまな意味や願いが込められていることを知り、「身近なロゴマークをもっとじっくり見てみたい」という声も聞かれるようになりました。

次は表現活動です。「この街の未来のシンボルマークをデザインしよう」と題し、自分の住んでいる街の魅力や地域の特徴を伝えるためのデザインを考えることで、社会とつながるデザインの意義について理解を深めていきました。

また、生徒の多くがスマートフォンを所有している実態をふまえて、スマートフォンアプリのアイコンをデザインする授業も行いました。この授業では、アプリの内容を考える人、そのアイコンをデザインする人、そのデザインを批評する人を、別々の生徒が分担して行うことで、情報を効果的に伝えるための客観的な視点や受け手への配慮の大切さを学んでいくことができました。



好きだけど、 役に立たない?

「美術は好きだけど、将来何の役に立つのかな?」こうした生徒のつぶやきに少なからず危機感を感じ、授業改善に取り組み始めました。

始めに取り組んだのは、美術科の学びが身近な生活や社会の中にどう生かされているかを実感してもらうための、生徒たちの身近にある「ロゴマーク」を題材とした鑑賞の授業です。

3

造形的に見る視点が 深まった

「シンプルにするためには、ただ単純化すればいいのではなく、どの情報を一番伝えたいのか考えることが大事だと思った」「普段見ているマークには、デザイナーの苦勞が詰まっているのだと知った」など、美術科の学びが身近な生活や社会の中に生かされ、それらの働きに気付くことのできる効果的な実践になったと感じています。

私たちの身の回りには、デザインされたものが無数に存在します。美術科の授業を通して、主体的にそれらに触れることは、社会の中の造形と豊かに関わるにつながります。



生活の場 目を向ける

例えば、自動販売機のある学校では、そこで売っている飲み物のパッケージを鑑賞対象にするだけで、生活の中に働く美術の力に気付くことができるかもしれません。まずは身近なところに目を向けてみましょう。



教師が用意 しすぎない

教師が用意した教材資料よりも、生徒自らが生活の中から選んできたものの方が、題材に興味をもつきっかけになるでしょう。美術と生活をつなげる第一歩として、生徒たちが「探す」活動を取り入れてみてはいかがでしょうか。



学校の“外”を意識させる

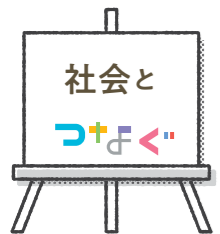
地域のシンボルマークを鑑賞して住んでいる地域の特色やよさを再認識したり、授業で制作した作品を外部の施設で展示させてもらっ

たりする機会をつくることで、授業での学びが外の社会とどう結び付いているのかを実感しながら学ぶことができます。

“現在進行形”の デザインに触れる



スマートフォンアプリのアイコンなど、日々更新されていくデザインを取り上げることで、今だけでなく、未来の世界に新しい価値を生みだそうと考えるきっかけをつくることも大切です。



美術の授業で多文化共生 — 歳時記の美・日本の美 —

さまざまなルーツをもつ子どもたち

アジアを含む11か国の、諸外国につながるルーツをもった子どもたちが在籍している本校。彼らにとっての外国文化“日本文化”を学ぶだけでなく、ルーツのある自国の文化について学ぶ機会があってもよいのではないかと考えました。日本の子どもたちも自国の文化について、本当に驚くほど知らないのが現状。さまざまな国につながる子どもたちに、自国の伝統文化を継承する意識を、美術を通して育てたいと思っています。

日本を含む諸外国の歳時記にまつわる美しいもの、自国の美しい文化だと感じるものの中で、自分が観たものや気付いたことを基に対象を選びます。なぜ美しいと感じ、何に心ひかれたのかを、丁寧にスケッチしながら鑑賞し、その背景を調べる。せめてお正月くらいは文化に関するものを観たり聞いたりする機会が多だろうと期待して冬休みの課題とし、新年初めての授業で発表会、という形をとっています。

新年最初の授業では、集まってきた子

どもたちから順不同でプリントを受け取り、写真に撮ります。それを拡大して映し出し、その順番で発表するようにして、自然と画面に注目するようにしています。大画面に丁寧にスケッチが投影されると歓声が上がります。調べたことを基に「自分の考えを発表する」ことを決めておくと、同じような発表にはなりません。それぞれが何に美しさを感じ、どんな背景に気付き、何を思ったのかを発表し合う機会になります。

2

自分の考えを発表する



他の先生とも共有する

転動してきたての先生や担任の先生方には積極的に見てもらい、彼らの見えな背景に気付いてもらう機会とするよいでしょう。



その子にとって無理のない発表方法

さまざまなルーツの子どもがいます。自国の言葉の方が伝えやすいこともあります。同じ国の子同士で協力して発表してもよいでしょう。スケッチがあれば、その子が何に注目したのか伝わります。

なぜひかれたのか理由があるはず

調べたい、知りたいには理由がある。選んだものを美しいと感じるのはどうしてだろう。色や形？ 雰囲気？ 何にひかれたのかを社会科の目ではなく、美術の力を通して見つめることを伝えましょう。



さまざまな情報をもとに考える

インターネットで見た一つのサイトの情報だけではなく、さまざまな情報を調べた上で自分なりの考えをつくることを伝えましょう。

私のお国自慢

自分の国のおいしい物や美しい物を紹介し合おうってすてき。気付かずに過ごしていたらもったいない！



自分が親になったとき

「自分が親になったとき、自分の国の文化を自分の子どもに伝えられる人になってほしい」という願いを伝えることは大切です。



3 いろいろな文化があるからおもしろい

「国は違っても、同じようなイベントがあるって思った」。どの国にも新年を祝うイベントがあり、祝い方は違うけれど気持ちは同じだと気付いた、比較的共通した感想です。

「国によって違いがある、それが文化なんだって思った」。日本のお雑煮の地域差の話や、ベトナムにも正月盆のようなものがあり地域差がある、日本以外にも習字が

存在することにも気付いた子どもの言葉。

「なんでって思ったことを知るの面白いねえ」。お正月に松飾りや鏡餅を飾る理由や、着物の柄に意味があること、おせちの食べ物に決まりや意味がある理由など、知っていそうで知らないことを知った喜びはみんな共通です。

「へー！ そうなんだ！」知らないことを知るって大人も子どももやっぱり面白い！

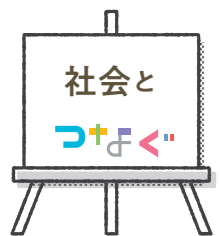


これからの社会は、さまざまなルーツや考え方の人たちとの協働が必要になるでしょう。造形を通じた学びは、そうした社会を生きるための力を与えてくれます。

「これが日本の文化だ」と教え込まない

歳時記の行事と宗教観は絡み合っており、「こうするべきである」と教え込むことは学校教育ではできません。見たもの、気付いたこと、歳時記にまつわる美しいものの中から、自分の興味関心が湧いたものを選ぶことが大切です。ま

とめでは、文化は生活の中であり、守り、守られながらもさまざまに変化しながら世界各国で関わり合っている姿を捉えることができるようにしましょう。



社会の中の美術に親しむ —パブリックアートに 足を止める子を育てる—



身近すぎて 見えないアート

建物、駅、公園、美術館など、公共に意図をもって設置されている彫刻の作品や記念碑といったいわゆるパブリックアートは、日常生活の中で身近に接することができます。しかし、よい意味で生活に溶け込んでいるため、気に留めないでいることもしばしば。学習指導要領の解説に、高学年では、自分自身を取り囲む場所や、三次元的な奥への広がりなどへの働きかけにより、光や風などの自然の環境、人の動きなどの場所や空間の特徴を捉える、といったことが書かれています。そこで、児童に立体をつくる面白さとともに、その立体が美しく見える場所に置いて空間を意識させ、場との関連を味わわせたいと考えました。そして、そのことがパブリックアートに興味をもち、さらには世の中のさまざまなよさや美しさに気付いてほしいと題材を設定しました。



場に作品を置いて、 見え方を味わう

土粘土を用いて、「心の形をつくる」をテーマとしました。立体をつくる時、「先生！後ろ側もつくるのですか？」と、子どもから質問されることはありませんか？子どもの中には、つくりたいものが浮かぶとき、写真を撮ったかのように正面のみを想像していることがあるようです。そこでまず、五年生の算数で学ぶ「立体や体積」を生かして「直方体」「球」などを粘土でつくり、塊や量感を認識できるようにしました。また、「たたら板」などの技法についても教えしました。さらに、本題に入る際には、形がないものを形にするため、言葉によって「気持ち」を出し合い板書で深めることを大切にしました。その後、完成した作品を自分で選んだ場所に置いて、写真を撮り、実際の作品と写真を並べて展示し、鑑賞しました。



子どもの発達の段階を意識する

自分→他者→社会と、子どもの世界は広がっていきます。発達の段階を意識し、高学年で身に付ける力を低学年から意識して積み上げていく必要があります。前学年までで十分に抑えられなかった場合は、補ったカリキュラムも必要です。



何を教師が教えて、 何を子どもが考えるのか



動き、奥行き、バランスなどを キーワードを基に言葉で語らせる

作品のテーマや、なぜ作品を置く場所をそこにしたのかなど、言葉にすることで、自分の振り返りになり、他者の作品を鑑賞することにつながります。



初めから用意しておく用具、途中から出す用具、子どもたちが創造力を働かせることができるようにタイミングを考えることも必要です。また、何を教えて何を考えさせるのか、ねらいを明確にしましょう。

パブリックアートに 足を止める

私たちは、表現や鑑賞の活動を通して、子どもたちの豊かな感性を引き出し、育てているということを忘れてはなりません。パブリックアートに足を止めるということは、日常の何気なく見ていたことがよく見たら面白かった、こんなにも美しかったのかなどと感じる力を育てることです。



つくることが きっかけに

写真などで立体作品を鑑賞することがありますが、子どもには、平面としか捉えられないことがあります。今回の場合であれば、自分で立体をつくる経験をしたことにより、空間に存在することに気付き、立体としてのよさや美しさが分かるきっかけになると考えます。

3 つくることで 見えてくる

子どもは、素材に触れて、手を十分に動かすことを保障すると、さまざまなことを思い付き、工夫します。自分の作品の写真を撮る際には、どの子ども自分が思った場所に迷わず持って行き、「木漏れ日のところに置きたい」「校舎の窓ガラスが背景になるように置きたい」といった、光や影、周りの

風景との距離を意識するこだわりが見られました。こうして、迷わず場所を決められるのは、つくりながら「あそこに置いたら、こう見えるだろうな」と、学校のさまざまな場所との見え方がある程度想像できる力が付いていることも分かりました。



幼稚園・保育園との連携 —互いの資質・能力を高め、 関係をつくる活動—



子どもの学びは校種で分断されるものではありません。
例えば幼児期の子どもたちの学びと小学校の子どもたちの学びをつなぐことは、
より長いスパンで子どもの成長を考えることになります。

2

造形活動交流 の実際



五年生と園児との交流では造形遊びを行っています。形や色で遊ぶのは園児も大好きなので、造形遊びはとても有効です。カラーコップを使った活動では、園児たちも思いのまま、使いたい色を決め、好きな場所に置いたり、並べたり、重ねたりしていました。

蛍光色を塗った割り箸を使った造形遊びも行いました。色付けされた割り箸は、園児にとっても魅力的な材料だったようで、好きな色を選び、うれしそうにたくさん抱えて教室に戻ってくる様子が多く見られました。

子どもたちは、園児のために「やってあげる」のではなく、園児の思いを大切にしながら一緒に楽しみ、園児の思いを上手に受け止めて自らも資質・能力を発揮し、高め合うことができていたと思います。また、はじめは平面的に並べるだけだった園児が、五年生が立体的に組み合わせる様子を見て、真似をするなど、一緒に活動する中でつくる形にも変化が見られました。

一年生との交流では、園児と一緒に、大きな紙に自分の好きなものをかく「好きなものカタログをつくらう」という活動をしました。完成した大きな絵は、子どもの好きなものが満載のカタログです。その後、全体を半分に分けて、お店屋さんとお客さんになり、お店屋さんごっこをして遊びました。そこでは「いらっしゃい!」「これください」といった子どもの元気なやり取りが見られました。

横浜市の推進する 幼保小連携

横浜市では、市内の幼稚園・保育園と小学校をつなぐ学びの在り方の研究を始めています。本校でも、連携推進地区の指定を受け、研究主題を「豊かな人間関係を築き、豊かな心を育む幼・保・小連携の推進」とし、幼稚園・保育園における表現の領域と、小学校図画工作科の学びをつなぐ活動をデザインし、年間を通して交流する活動を平成28年にスタートしていろいろな学年での交流を行っています。

幼保小の交流を通じた学びを、 造形活動を通して 行うことの成果

造形活動は、子どもにとって活動そのものが楽しく、自然に心が開放されていきます。人と関わることを通して、自分の思いを表現して伝えたり、友だちの思いを受け止めたりすることの大切さを味わい、形や色とたくさん触れることも加わって、心が一層豊かになったのではないのでしょうか。実践としてもまだまだ少ない領域なので、今後の展望が楽しみです。

園児、児童ともに 意味のある活動にする

双方の教育課程にとって意味のある活動になることは大切です。造形遊びは、小学生が園児のために「やってあげる」のではなく、園児の思いを大切にしながら、一緒に楽しみ、資質・能力を高めることができます。また、園児にとって年上の子どもの発想から、新しい造形的な見方が広がります。



入学後の事も 考える

例えば五年生と交流を行うと、園児が入学したときに一・六年生というペア学年になります。子どもたちのその後の生活のことも考えて交流することが大切です。

同じように経験 している活動にする

園児と一年生での活動では、お店屋さんごっこでのやり取りなどが自然に生まれました。それぞれで同じような経験をしている効果だと考えます。



成果物を掲示する

活動中の写真や、一緒につくった作品を学校に掲示しておくこと、入学後の子どもたちもそのときのことを思い出し安心することができます。





将来の姿を思い描く —「表そう! 未来の自分!」—

卒業を控えた 子どもたち

小学校卒業を前にした子どもたちは、卒業アルバムの文集づくりや、保護者に向けた感謝の会、そして卒業式の準備などを通して、将来の自分を考えることが多くなります。そこで、形や色を使って表現する図工の活動を通

して「なりたい自分」の姿を想像し、表現する活動を行うことにしました。小学校生活最後の絵に表す活動であり、これまで学習してきた表現方法などを活用し「未来の自分」をイメージして表す活動です。

文集づくりを通して、「未来の自分」の姿を想像し文章で表す中で、「みんなの未来の姿を絵で表そう」と投げかけました。「未来の自分」についての思いを巡らせ十分に考えていたため、表したいことをすぐに見付けることができました。

大切にしたことは、「将来就きたい職業」ではなく、「なりたい自分」を考えるようにしたことです。職業に就くことがゴールではなく、仕事を通してよりよい自分をつくるのが幸せな人生を歩むことにつながると伝えられたからです。例えば「プロ野球選手になりたい」と思っている子どもには、「どのような選手になりたいのかな」と考えるように投げかけました。すると「みんなから応援される選手になりたい」という答えが返ってきました。

その上で、アイデアスケッチをし、美術作品や写真、友だちの表現などを見ながら、表し方を考えていきました。そして画用紙いっぱい絵の具などを使って「未来の自分」を表現しました。子どもたちは、表したいことが自分そのものであったことで、これまでよりも細部にこだわり、構図や彩色の工夫を凝らした表現活動を行うことができたようです。

2

活動内容の 紹介



3

「なりたい自分」や 「夢」をもって 人生を歩んでほしい

「学校の先生になりたい」という将来を想像していた子どもが、絵に表すことを通して「信頼されるってどういうことかな」「子どもが笑顔でいるってことかな」「教室はきっと明るい雰囲気だね」と考えるようになりました。形や色を通して、より具体的に将来の自分の生き方を考えることができたようです。

私は、よりよい人生を築くためには、「なりたい自分」を具体的にイメージし、試行錯誤し、実現していくことが大切であると考えています。子どもたちにはこれからも、「なりたい自分」や「夢」をもって人生を歩んでほしいと思っています。

子どもたちがそれぞれの人生を豊かなものとして歩んでほしいというのは、私たち教師みんなの願いではないでしょうか。そのために、図工や美術ではどのようなことができるのでしょうか。



他教科と 関連付ける

今回は、国語の授業での文集づくりと関連付けました。「未来の自分」を十分に考えていたことで、ほとんどの子どもがすぐに表したいことを見付けることができ、表現を追求する時間の確保にもつながりました。

これまでの学びと 関連付ける

これまでに学んだことを振り返り、本活動で生かせそうなことを考えられるようにしましょう。これまでの活動で工夫したことを、写真などを使って振り返るのもよいでしょう。

子どもたちが 将来、今の気持ちを 思い出すことが できるように

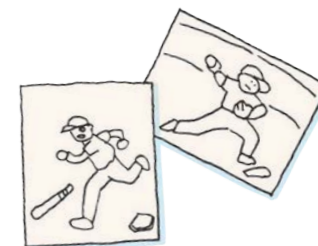


「未来の自分」を、将来見ることができるよう、かいた絵をポストカードにして成人式を迎えた子どもたちに送ることを考えています。絵がタイムカプセルのようなものになるとうれしいです。

友だちと 話し合うことも 大切に

友だちと鑑賞し合う時間も大切です。自分がこだわりをもって表したことで友だちの工夫にも気が付き、自分の表現に生かすことができます。

アイデアスケッチ をする



考えた「未来の自分」を形や色でどのように表せばよいのかをじっくりと考えるには、アイデアスケッチも有効です。



一人ひとりの子どもに寄り添う —できた！ それを待つ時間と 場所がここにある—

ありのままの 自分を生かす

本学園は、「学校が子どもを選抜する立場ではなく、子どもたちがありのままの自分を生かし、そこからさらに一歩成長していける学校」という理念のもと、オルタナティブ教育(子どもたちの多様なニーズに応えられる多様な教育力)、インクルーシブ教育(子どもたちのさまざまな個性を包括的に受け入れ適応力を育む教育

力)、レジリエンス教育(困難な状況、自信喪失した心の回復力を育む教育力)を目指す学校です。このような環境の中で、図工・美術教育の果たす役割がいかに有用であるか、具体的実践例を挙げながらご紹介いたします。

このように環境の中で、図工・美術教育の果たす役割がいかに有用であるか、具体的実践例を挙げながらご紹介いたします。



子どもたちに寄り添うために

2

いつも心がけていることは、子どもたちに寄り添うことです。そのために、活動の必然性や身近にあるものを使うこと、子どもが活動に見通しをもてること、失敗してもやり直しを保障することなどを大切にしています。

学校ではお祈りの時間があるので、そこで使うしおりをつくる活動を実施しました。好きな聖句を選び、学校のある大磯の自然を感じてしおりに表す活動です。またサマーキャンプで使うパンダナを自分で染める活動や、社会科と連携し、岩崎山の泥岩を生かして自分たちで粘土をつくり縄文土器を製作する活動もしました。

失敗もあります。ある活動で大きなボトルから小皿にニスを手で取り分けるとき、入れ過ぎた子どもがいたので「次の人に半分あげよう」といって皿を持って移そうとしたところ「減らすならや〜らない」とすねてしまったのです。彼が入れたニスの量は「やる気の量」だったんだと気づきました。

3

一人ひとりの特性を 大切にする

使えるものをつくった時は「さっそく使いたいです」と言ってくれました。友だちからの「とにかくいろいろやってみようよ」という言葉に励まされ意欲をもてた子どももいます。時間を確保することで「あきらめないで最後まで頑張ろうと思えるようになった」と言ってくれた子どももいます。保護者の方からも「子どもの感性を引き出してくれたことに感謝します。本人の表情からも満足していることが伝わってきました」といった言葉をいただきました。

一人ひとりの特性に合わせて、場の設定や、材料などの備え、時間的な見通しを考慮することが、よい準備であり、子どもたちの可能性を引き出す実践に欠かせないものだと考えています。

一人ひとりの特性に合わせた授業づくりは一見大変なようですが、誰かにとって分かりやすい授業は、より多くの子どもにとっても分かりやすい授業になるはず。そうした授業づくりが、子どもたちの自己肯定感を高め、豊かな人生を過ごす力となるのではないのでしょうか。

つまづき
ポイント

先を急がず時間をしっかり確保する、
一つひとつ体験していくようにする

一歩踏み出す
勇気をもてるように

その子のペースやリズムを尊重しつつ、
実体験を通じた学びが、確かな学びに
つながっていきます。

生活に密着した
題材を設定する

生活に密着した題材設定は、分かりやすく、何をどうすればよいのか、
子どもがイメージしやすくなります。

考えることや
活動することの
数を極力絞る

分からないことや不鮮明なことによる
ストレスをできる限り減らす手立てが
重要です。
材料・用具類の場所などははっきりし
ておくといったことから始めましょう。

つまづきを
保障する

活動の途中で引っ掛かってしまったとき、待ってあげること、やり直してもいいこと、何につまづいたのか寄り添いながら聞くことが、安心して表現できることにつながります。イメージと少しずれただけで意欲を失う子どももいますが、粘り強く声をかけることで、気を取り直すことができました。

言葉にならない
声を聴く

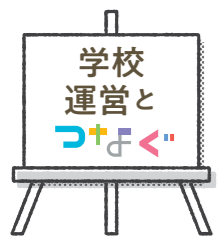
聞きたいことがまとまりきらなかったり、聞くことに自信がもてなかったりしている子どもがいたら、「〇〇したいのかなあ？」って声をかけたいですね。授業前に作品を見ておいたり、その日の活動初期段階で、迷いそうな子どもを確認しておくと、見えてくることがあります。子どもたちの「言葉にならない声」を聴き、すっと寄り添えたら、きっと何かが変わるでしょう。

「やりたい」と言うことは、
まずやらせてみるための
準備と度量

子どもたちが、「～していいですか?」「この材料(用具)を使って〇〇したいです」と教師が想定していなかったようなことを思い付き相談してくることがあります。その子どもはきっとその瞬間が興味関心 MAX なのでしょうから、危なくない限りまずはやらせてみる。それができるだけ活動予測と準備をした上で、「いいよ。やってごらん」と言える度量をもちたいですね。



自信がもてず、思いをなかなか表せずにいる子どもたちにとって、仲間と「つながる」協働的な学びの場は重要です。「みんなと一緒にいい」ではなく、友だちのよさに気付いたり、「こうしたらいいよ」と友だちから背中を押してもらったりして、「自分らしさを表せる」雰囲気づくりと、安心して取り組めるステップを保障していきましょう。



学校運営に美術を活用 — 行事を活用して、 美術で学校運営しよう —



学校行事などでも美術の力は欠かせません。
ここでは一步踏み込んで、学校運営に美術を生かす取り組みを紹介します。
そのことが、子どもたちの学びをより豊かなものにしていきます。

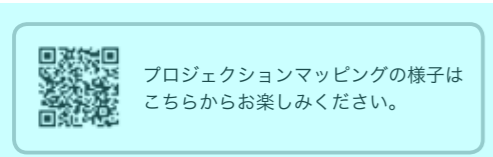
1 いろいろな人と協力して 戦略的な学校運営を

子どもたちがこれからの社会を生き、つくり続けるために、学校管理職は社会の動きに敏感でなくてはなりません。さらに、子どもや教職員そして地域の方々の声に耳を傾けることが大切です。戦略的に学校運営をすすめることは、もちろん大切です。教職員の皆さんは子どもたちのためのさまざまなアイデアをお持ちです。中学校の先生方においては教科などの専門性があり、それぞれの得意分野での豊富なアイデアや要望があります。



3 豊かな学びのために 芸術的な視点を取りこむ

校内において、美術科教員は少なく、学校規模によっては非常勤教諭や免許外教員が授業を担当せざるを得ないときもあります。当然、発言の機会は限られてきます。だからこそ学校管理職としては、芸術的な視点を学校運営の中に位置付けていただきたいと考えています。それが、子どもたちの豊かな学びへとつながっていくのです。



2 文化祭での プロジェクション マッピング

ある年、ある学校の文化祭でプロジェクションマッピングが行われました。子どもたちからの「やってみたい」という声を職員が聞きつけ、相談してきたことがキッカケの一つです。管理職がそのようなことに強く関心をもっていることを知っていたからこそ耳に入れたのです。この活動で子どもたちは最先端技術を目の当たりにすることになります。また、シナリオづくりやBGM作成などで国語や音楽、さらに特活や道徳なども含めた教科横断型の取り組みが必然となるのです。屋外で行うために、立体スクリーンを段ボールでつくったり、既存の音楽だけでなく自分たちで効果音を考えていったりし、活動が膨らみました。

また、自分たちが制作したものを発表する場として、校内展示や校外での発表が考えられます。ある時、地域と相談・連携し、子どもたち手づくりのフリーマーケットを企画しました。子どもたちは、価格をつけ、店開きをし、声をかけ、やり取りをしながら改めて自分たちのつくったものを実感していました。どうしても手放したくない作品は「非売品」として店先に並べていました。なかなかの高値を付けたものもありましたが、それでも売れたものもありました。売り上げはユニセフに寄付し、感謝状をいただきました。

子どもの学びに どのように つながるかを考える

地域からは常にさまざまな要請があります。それは、子どもたちにとって大きなチャンスでもあります。管理職として、何をどのように受け入れ、職員に伝えるかが肝になります。その際、「子どもの学びにどのようにつながるか」は常に考えなければいけません。

コーディネーター としての管理職

「子どもの学びにどうつながるか」だけでなく、「職員の働き方をどのように調整するか」も大切です。情報を教職員と共有し、全体をマネジメントしながら学校教育を改善するのが管理職の仕事です。



アンテナを高く

教育委員会や文化庁などによる文化芸術による子どもの育成事業の企画もあります。管理職はアンテナを高くしてそれらの有効活用を考えましょう。

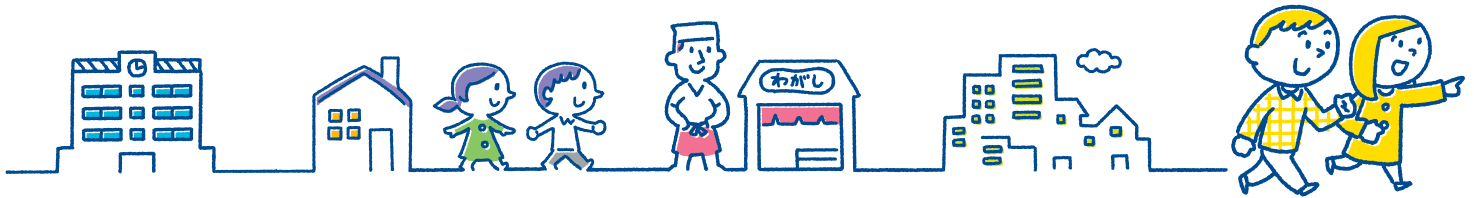
地域の材を 活用する

横浜市では学校・地域コーディネーターという組織が存在し、学校と地域との仲介的働きもしていただけます。そうした組織がない地区でも、地域には多くの人材が存在します。積極的な協力体制をつくりあげましょう。



学校行事を 活用する

今回ご紹介した「文化祭」が代表例となるでしょう。会場の設営デザインなどを美術担当教諭などに任せるとありますが、子どもたちや教職員の声、そして外部機関との連携を円滑につなぎコーディネートすることを考えると管理職の役割、立ち位置は非常に重要なものとなります。



図工・美術でゆたかなくらし

日文 教授用資料

平成31年(2019年)2月27日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL: 06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33417

日本文教出版 株式会社
<http://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171
東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618
九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938
東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261
北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690